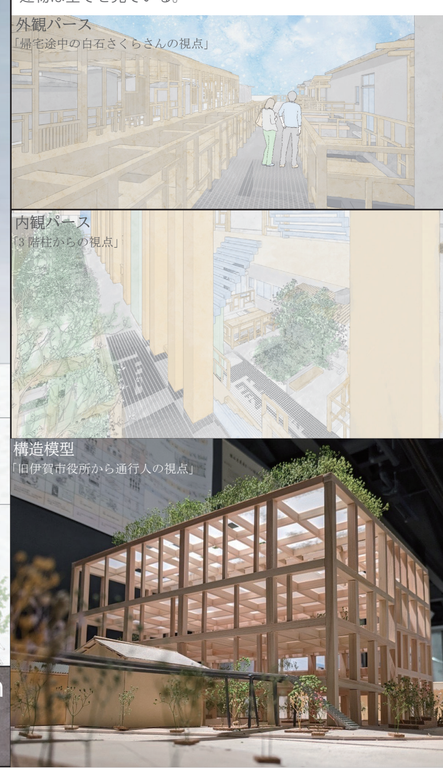
僕がいた街

-22 年前からの置き手紙 -



0281

人が五感で周辺環境を感じ取るように、柱や梁、床、建具と張り巡らされた構成要素もまた建築の感覚器官なのである。建物は全てを見ている。

1 思い出

生まれてからの 22 年間を伊賀市で過ごした。
天神祭りの鬼行列で泣いたり、伊賀の町並みや旧伊賀市役所の前を歩いて小学校に通ったり、田んぼ道を犬と散歩した良い思い出がたくさんある。映画館がなかったり、電車が一時間に一本だったりで不便な街だと思われるかもしれないが、かけがえのない生まれ故郷である。

散歩で見た景色

その思い出と街の一部である伊賀市役所が 2019 年に移転した。そして 2022 年 1 月から 3 月にかけて行われた坂倉準三が設計の旧伊賀市役所のリノベーションに関するワークショップが開かれた。自身も一市民として参加し、伊賀が様々な課題を抱えていることを知ったことが、伊賀の未来を再考するきっかけとなった。

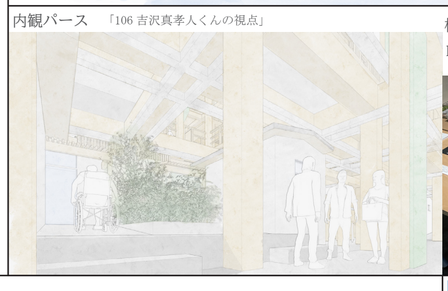
2 旧伊賀市役所のリノベーションに関するワークショップ

そこでは参加者には付箋とペンが配布され、「どのような空間や施設が望ましいか」「3 階の議会室をどのように活用すべきか」などのテーマが提示され、各自の考えを付箋やホワイトボードを使ってディスカッションする形式であった。多くの参加者が挙げた伊賀の現状に対する課題や、中には涙ながらに地域が抱える問題や設計案に対して改善していかねばならないと懸命に訴える姿が印象的であった。そういった想いが溢れる空間を体験し、伊賀の課題を改善すると同時に、伊賀の今と未来についてワークショップのように、全ての人が語り合える場が必要であると確信した。

3 思い出

人々が抱く歴史と文化、自然が調和した伊賀への印象とは裏腹に、様々な課題を抱える。2022 年 1 月から 3 月にかけて行われた坂倉準三が設計した旧伊賀市役所のリノベーションに関するワークショップに自身が参加し、これらの課題が浮き彫りになった。それは届かぬ市民の声や労働・観光の衰退など昔から認知されていたが、未だ理想とは離れた平行線上にいる現状であると言える。それに対して自身や人々の 22 年間の記憶の蓄積を舞台に、住人や社会の出来事、想い出との対話を通じて、集合住宅を主軸に浴場（テルマエ）及び観光も含むイベント屋台を設け、課題に関する接点や交点とし、諸状況の改善を試みる。加えて伊賀の歴史や都市性を読み解き、建築的観点から更なる魅力的な伊賀の未来について再考することを目標とする。

内観パース 「106 吉沢真孝人くんの視点」



模型写真
1 階から 5 階までの住戸模型

4 現状と課題 1 「労働力・職人の減少」

過去には企業の進出や住宅団地の開発などにより、人口は緩やかに増加していたが、最近では住宅団地への人口流入が減少し、それに伴って全体的な若手の人手不足に転じている。
同時に、伊賀牛や伊賀米、伊賀茶などの第一次産業に従事する労働者も年々減少しており、これにより伊賀の労働力確保がますます課題となっている。

図 1　三重県伊賀市の人口推移

図 2　伊賀市の年齢別人口構成

5 現状と課題 2 「届かず埋もれる市民の声」

ワークショップでは市民の様々な声を聞くことができた。それは「素敵な伊賀に変わっていってほしい」という前向きな希望や、 涙を流しながらも伊賀の未来について語られる悲痛な叫び声。反映されることがほとんど無く、日々積もらせる想いを一方的ではなく、すべての人が語り合えるフラットな場が必要であると感じた。

旧伊賀市役所の外観
小学校 6 年間の通学路で毎日見た光景。
伊賀市の宝であり、伊賀上野城と共に街のシンボル。

ワークショップの様子
初日は旧伊賀市役所を見学し、どのような空間でどういった用途で利用されていたかを細かく教えて頂いた。50 人ほどの市民などが参加しており、活気があった。（2023 年 1 月 29 日撮影）

ワークショップの様子
見学するにあたって、各自三か所についてリノベーション後、その場がどのような使われ方をしてほしかというお題があった。「ここがこうなればいいな」と楽しさそうな声を

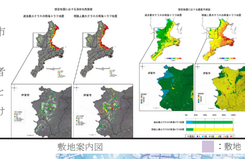
お題について、ディスカッションを通してホワイトボードの平面図に自身の考えを付箋に書いて貼る場面。
老若男女が集まっていたので、想像していなかった視点からの意見は大変勉強になった。

6 現状と課題 3 「PR 力不足」

伊賀市は様々な魅力を有している。世間一般的には忍者が有名であり、市民としても誇りに思う。しかし伊賀の観光は忍者の一本槍であり、天神祭りや町家が並ぶ旧市街地などのその他の魅力を十分に伝え切れていない事実は大変もったいないことである。一つの大きな強みのみならず、多彩な可能性にも目を向けることも大切なのではないだろうか。

7 現状と課題 4 「自然災害への対策」

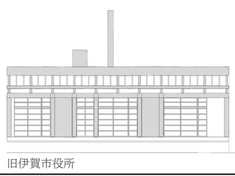
三重県は南海トラフなどの自然災害に対して大きな被害を受けると想定されている。理論上最大クラスでは伊賀市で震度 6 弱、海岸沿いでは 6 強から 7 とされている。また想定地震における液状化危険度では三重北部の桑名市から伊勢市までの海岸沿い全域が極めて高いとされており、また尾鷲などの南部も津波で大きな被害に見舞われる。これらを踏まえ、以前 陸上自衛隊員に癒った話では、災害発生後 伊賀には自衛隊による救助や支援が行われないそうだ。正確には、比較的に三重県全域の中でも伊賀市は被害度が少ないことから他の地域に比べて優先順位が低いとのことである。市民は受け身の姿勢でよいのだろうか。また伊賀市には外国人住人数は約 5500 人にのぼり、外国人の視野に入れた災害計画が必要である。加えて関西圏からの来訪者も多いことから、多数の帰宅困難者などの影響を受けると想定される。伊賀市内に留まらず、外部からの避難者受け入れ体制を整えることも未来を考える上で必要である。



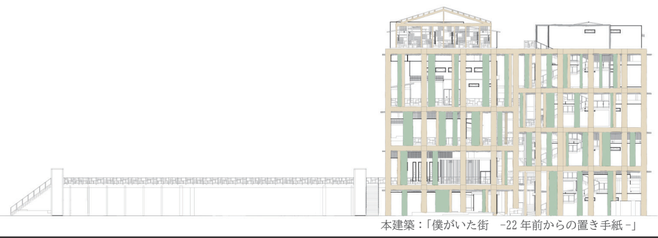
8 Concept1：「木造フレームと多様な住空間」

木造フレームを採用することにより、建物の軽やかさと透明感を引き立て、旧伊賀市役所との調和を試みる。また木の温もりが地域の文化や町並みと呼応するとともに、建物全体に木材の温かみを与える。またフレーム内の住戸に蔵の設置や豊かなアプローチ空間、趣味やライフスタイルが反映される可変性のあるプランとすることにより一軒家に住んでいるような豊かな内外部空間を創出する。木造フレームを取り入れることで、住まいの選択性を拡張し、地域全体に一体感と美しさをもたらすことを目指す。

旧伊賀市役所と本建築の関係を表した立面パースダイアグラム



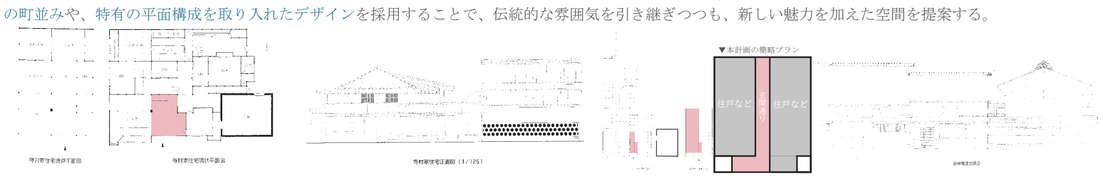
旧伊賀市役所



本建築：「僕がいた街　-22 年前からの置き手紙 -」

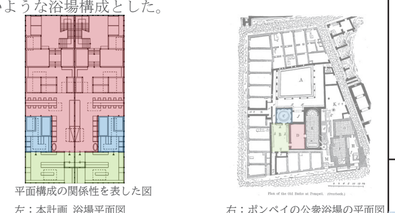
9 Concept2：「伊賀上野の伝統的な町家の特色を取り入れたデザイン」

伊賀の古風な町並みに調和するためにも、伊賀上野の町家の特徴に注目した。そのため、本計画では、伊賀の町家で見られる妻入りと平入りが入り混じる独自の町並みや、特有の平面構成を取り入れたデザインを採用することで、伝統的な雰囲気を引き継ぎつつ、新しい魅力を加えた空間を提案する。



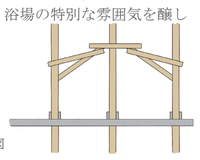
10 Concept3：「浴場空間を構成するローマ建築の木造的解釈」

・テルマエの平面的な特徴を浴場空間に組み込んだ。具体的には、脱衣所を介して 2 つの浴場にアクセスできる構造とし全利用者と子供連れ、高齢者、身体が不自由な方が利用しやすいような浴場構成とした。



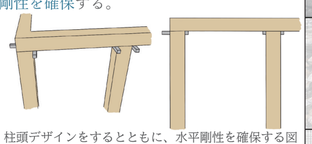
平面構成の関係性を表した図
左：本計画 浴場平面図　　右：ポンペイの公衆浴場の平面図

・浴場空間に木造アーチを取り入れることで、西洋の伝統的な建築様式と自然素材を組み合わせ、温かみのある雰囲気を演出する。木造とアーチが生み出す直線と曲線美は、空間に柔らかな印象を与え、木の質感と調和する。これにより、人々に心地よい空間を提供し、浴場の特別な雰囲気を醸し出す。



木造アーチの図

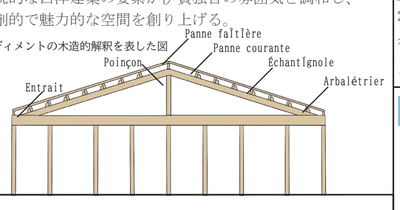
・構造体である柱の柱頭に南北方向と東西方向に交差するように柱に沿って梁を配置することで、柱頭デザインを施すと同時に、水平剛性を確保する。



柱頭デザインをするとともに、水平剛性を確保する図

・シュラクーザの教会を参考にしたテルマエ空間のペディメントを木造で解釈することで、西洋建築様式と伊賀の風土が融合したデザインが生まれる。この融合により、伝統的な西洋建築の要素が伊賀独自の雰囲気と調和し、独創的で魅力的な空間を創り上げる。

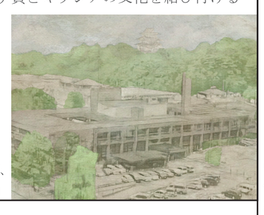
ペディメントの木造的解釈を表した図



11 Concept4：「ギリシアの都市的特徴を組み込んだ広場計画」

伊賀上野城周囲がアクロポリスの丘、旧伊賀市役所や小中学校、本建築がアゴラという関係性に注視し、広場を建築内に挿入することにより、都市性を創出する
また「火・風・雷・水・土」の五大性質を広場や住戸に取り入れることで、伊賀の忍者文化を広場に織り交ぜつつ、同時に伊賀とギリシアの文化を結び付けることにより、独自で豊かな都市環境が生み出せる。

・火の広場：火の求心性を生かし、キャンプファイヤーを囲んで語り合う場として、温かく結束力のある雰囲気を提供する。
・風の広場：風が抜け、天井の布がなびくことで、開放感と自然の伊吹を感じさせる場
・雷の広場：シアター広場として日常的に利用し、冬には美しいイルミネーションが飾られる場
・水の広場：水の清潔さや流動性から、水の流れる音や景色から心の浄化を促し。不定期でアート作品を展示。
・土の広場　各住戸に設置するコンポスト「黒土」：有機廃棄物の処理を積極的に行うことで、環境教育の一環となるとともに、自然との調和を環境への取組みを具現化する

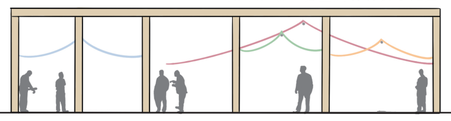


伊賀上野城と旧伊賀市役所、小中学校の関係を表した図

12 Concept5：「楽市楽座を取り入れた屋台型観光施設」

軽快な構造を持つ屋台の形態を採用することで、移動可能な特性を活かして様々な場所で伊賀のマーケット文化の雰囲気を再現し地域の特産品や食文化を提供する。これにより、地域の観光資源を魅力的に展示し、観光客や地元の住民が気軽に楽しむ場となり、地域の活性化と新たな訪問者誘致に寄与することを試みている。偶発性に満ち、賑やかで活気に満ちた商店空間と移動可能な屋台型観光施設が共存することで、地元の魅力と個性が感じられる総合的な場を創出する。

軽やかな屋台空間をを表した図



13 対象敷地

三重県伊賀市は三重県北西部に位置しており、山や川に囲まれ田畑の広がる豊かな自然を誇る。また伊賀上野城と城下町、忍者、俳句、伊賀焼など多彩な文化価値を多く有する。現在の伊賀簡易裁判所の敷地を対象とし、周囲には旧伊賀市役所や伊賀上野城などが近接する街の中心地である。

敷地楽内図　■：敷地

14 敷地分析

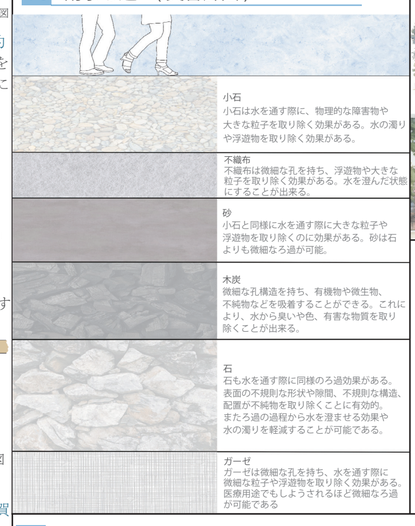
敷地の特徴として、学生の通学路に面しているだけではなく、周辺には駅、公共施設、店舗が多数存在しており、時間帯によらず絶え間ない人通りがある。このため地域の活気や交流が期待できる場所と言える。さらに、観光客が多いことから、単なる市民の循環にとどまらず、広範囲にわたる人々が訪れる場所であることが分かる。敷地の北側と南側では、周辺の町並みが異なる特徴を持っている。北側は住宅地や大型商業施設が建ち並ぶエリアであり、近代的な商業活動が盛んである。一方で、南側は城下町の趣を残しつつも、商店街の再生や美観の向上に力を入れており、魅力的なエリアが拡がっている。これにより、敷地は異なる雰囲気やアクティビティを楽しむことができる多様性を持った地域のインターセクションの機能を持つ場に位置する。

伊賀市の古地図

15 敷地概要

所在地：三重県伊賀市上野丸之内 130-1　敷地面積：3278.15 ㎡　建築面積：2076.04 ㎡　延床面積：3803.06 ㎡

16 雨水ろ過 （災害計画）



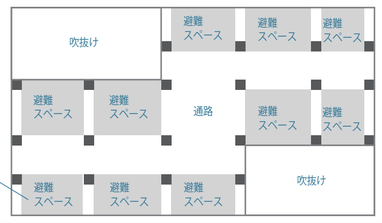
17 構想パース

AI 画像生成ソフトにより作成

18 災害時に避難所として活用できる楽市楽座のグリッドプラン

普段はタープをかけた屋台型観光施設であるが、災害時には避難所などに活用することができる。

グリッド空間はカーテンや段ボール、テントなどをはりプライベート空間を確保する。
本避難所では長期的な滞在は視野に入れておらず、帰宅困難者や次の仮住まいが見つかるまでの短～中期的な滞在を想定している。



20 記憶の蓄積

22 年間の住人や社会の出来事、想い出との対話を通じて「記憶の蓄積」から本質的な建築を見つめ直し、新たな視点からその魅力を引き出す試みを行った。住人について深く考察することにより、建築物が単なる空間の提供者だけでなく、共感や思い出の場としていかに機能しているかを再認識することができる。

21 記憶の建築化

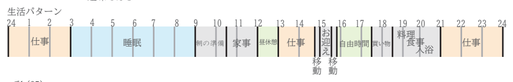
・22 年間を彩る 34 住戸 83 人の住人情報を具体的に設定することで、記憶を介した時間軸の奥行きを創出し、生活や体験を通した住人同士、地域、建物との繋がりを図る。

・住み継ぎ、住みこなし、住み開き、住み替え、住み分けの 5 つの手法を住戸内に取り入れることで、住まいは単なる空間を越え、家族や住人の世代を経て、歴史や思い出、地域との繋がりを空間的に継承する機能を果たす。

22 住人設定 （Room312 の人生）

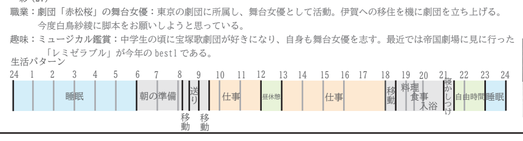
312　移住　夫婦
本元　拓海 (30)
職業：イラストレーター：東京の芸術大学を卒業後、フリーのイラストレーターとして活動。企業案件をこなす以外にも、小説家などの表紙を任せられることも最近では増えている。
趣味：水彩画模写：街の風景や漫画のキャラクターなどを模写し、その時の気分や感情に合わせて色や技術を変える。その時に しか出せない味が描ける水彩画が昔からの趣味である

生活パターン



彩 (27)
職業：劇団「赤松桜」の舞台女優：東京の劇団に所属し、舞台女優として活動。伊賀への移住を機に劇団を立ち上げる。
今度白鳥紗綾に脚本をお願いしようと思っている。
趣味：ミュージカル鑑賞：中学生の頃に宝塚歌劇団が好きになり、自身も舞台女優を志す。最近では帝国劇場に見に行った「レミゼラブル」が今年の best1 である。

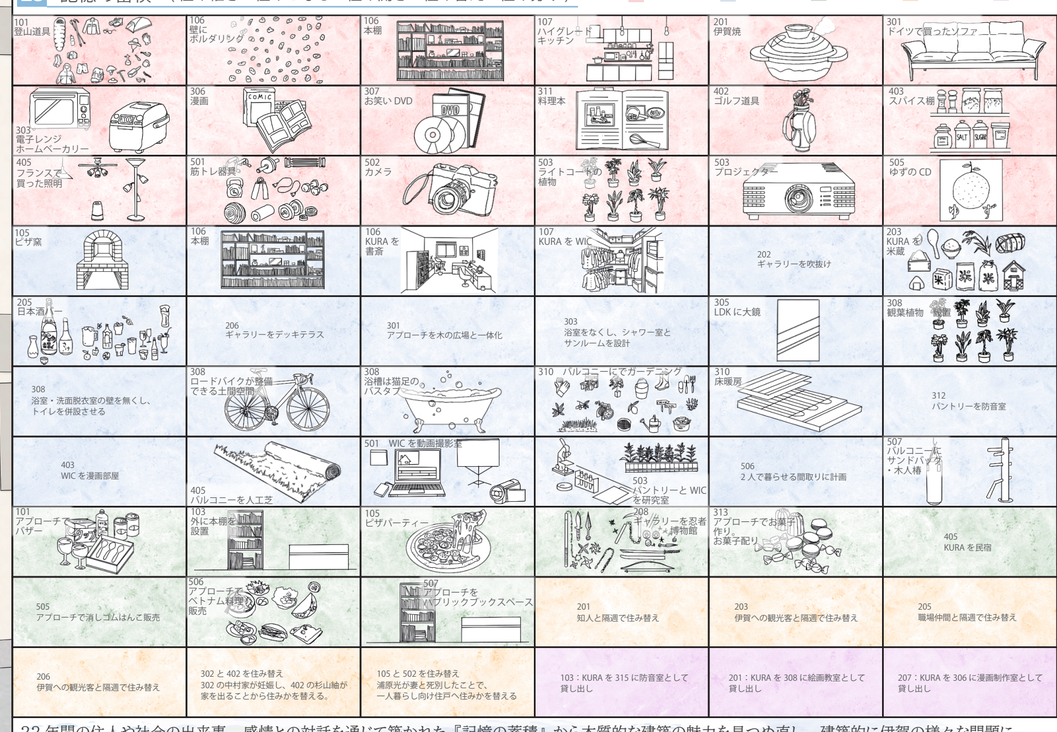
生活パターン



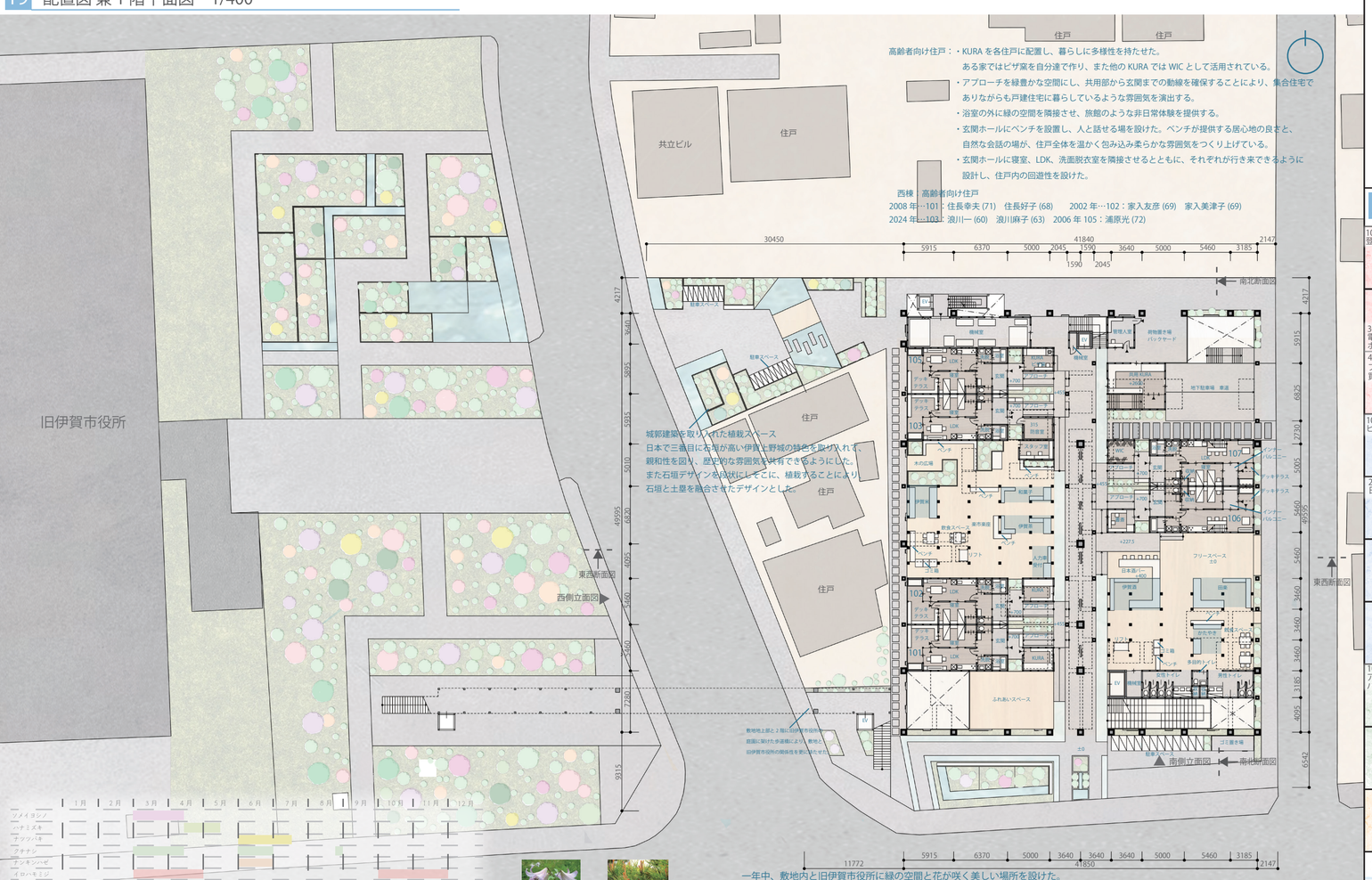
312 住戸プラン パントリーを防音室に住みこなし

23 記憶の蓄積 （住み継ぎ・住みこなし・住み開き・住み替え・住み分け）

住み継ぎ　住みこなし　住み開き　住み替え　住み分け



19 配置図 兼 1 階平面図　1/400



高齢者向け住戸：・KURA を各住戸に配置し、暮らしに多様性を持たせた。
ある家ではピザ窯を自分達で作り、また他の KURA では WIC として活用されている。
・アプローチを緑豊かな空間にし、共用部から玄関までの動線を確保することにより、集合住宅でありながらも戸建住宅に暮らしているような雰囲気を演出する。
・浴室の外に緑の空間を隣接させ、旅館のような非日常体験を提供する。
・玄関ホールにベンチを設置し、人と話せる場を設けた。ベンチが提供する居心地の良さと、自然な会話の場が、住戸全体を温かく包み込み柔らかな雰囲気をつくり上げている。
・玄関ホールに寝室、LDK、洗面脱衣室を隣接させるとともに、それぞれが行き来できるように設計し、住戸内の回遊性を設けた。

西棟　高齢者向け住戸
2008 年…101：住長幸夫 (71)　住長好子 (68)　　2002 年…102：家入友彦 (69)　家入美津子 (69)
2024 年…103：浪川一 (60)　浪川麻子 (63)　2006 年 105：浦原光 (72)

城郭建築を取り入れた植栽スペース
日本で三番目に古墓が高い伊賀上野城の特色を取り入れ、親和性を図り、歴史的な雰囲気を味わうできるようにした。
また石垣デザインを採用してここに、植栽することにより、石垣と土壁を融合させたデザインとした。

敷地地上部と 2 階に伊賀市役所が隣接。
敷面に架けた歩道橋により、敷地と
旧伊賀市役所の関係性を表現させた。

一年中、敷地内と旧伊賀市役所に緑の空間と花が咲く美しい場所を設けた。
四季折々の自然の変化を感じられるよう、植栽計画には様々な季節の花や樹木を配置した。
緑の空間と花が咲くことで、訪れる人たちは自然の美しさに触れながらリラックスでき、
地域のコミュニティースペースとして利用される場とした。

22 年間の住人や社会の出来事、感情との対話を通じて築かれた『記憶の蓄積』から本質的な建築の魅力を見つめ直し、建築的に伊賀の様々な問題に向き合った。卒業制作に取り組むにあたって、映画のシナリオを描くように建築設計を行った。以下は本物語のあらすじである。

「ある男のもとに一通の差出人不明の手紙が届く。そこにはどこか見覚えのある文体で「　　」と綴られた記憶にない文章。にわかに信じがたいが、どうやらこれは○○に○○ことが記されているらしい。そして知る。自分がしなければならないことを。男は名もない設計士であった。」

これは、映画のシナリオを描くように拓く、未来への手紙である。